

第12回

中学生訪中親善使節団報告書

平成16年3月26日(金)～3月31日(水) 6日間

上海・南昌・北京



財団
法人

Takamatsu International Association

高松市国際交流協会

目 次

I	団 員 名 簿	1
II	日 程	2
III	使節団の活動状況	3
IV	感 想 文	9

第12回中学生訪中親善使節団団員名簿

団 長	ふじもと よし 藤 本 良志美	(助)高松市国際交流協会常務理事・事務局長
同行保健師	よし い ゆみこ 吉 井 由美子	高松市保健センター保健師長
同行職員	ひら やま ま ゆみ 平 山 万友美	(助)高松市国際交流協会事務局員
団 員	なか むら あや か 中 村 綾 香	高松市立桜町中学校2年生
ク	ち ぼ ゆき え 千 葉 幸 絵	高松市立玉藻中学校2年生
ク	なべ しま ひろ き 鍋 嶋 広 樹	高松市立協和中学校2年生
ク	にし やま なな ほ 西 山 七 穂	香川大学教育学部附属高松中学校3年生
ク	じん ない れ み 神 内 玲 美	高松市立木太中学校3年生
ク	とし もり ふくこ 歳 森 ふくこ	高松市立山田中学校2年生
ク	いず み し ほ 和 泉 志 穂	高松市立桜町中学校2年生
ク	みぞ おち は る か 溝 渕 悠 代	香川大学教育学部附属高松中学校3年生
ク	たけ うち しげ ひこ 竹 内 滋 彦	高松市立光洋中学校2年生
ク	き おか だい や 喜 岡 大 哉	高松市立一宮中学校3年生
ク	さか い ゆう た 坂 井 友 太	高松市立香東中学校3年生
ク	ほり ふうみ え 堀 史 笑	高松市立屋島中学校2年生

第12回中学生訪中親善使節団日程

2004年3月26日(金)～3月31日(水)

日次	月日(曜)	主 な 行 事	宿 泊
1	3月26日 (金)	7:30 アイパル正面玄関前集合 8:00 高松発(専用バス) 11:45 関西空港着 13:45 関西空港発(CA922) 15:05 上海着 東方明珠塔見学	上 海 泊 上海賓館 上海市烏魯木齊北路 500号 TEL: 86-21-62480088
2	3月27日 (土)	上海動物園、上海博物館、南京路、豫園、 外灘見学、黄浦江見学 20:30 上海発(夜行列車K287)→南昌へ	車 中 泊
3	3月28日 (日)	7:37 南昌着 8:30 朝食 10:20 滕王閣見学 10:30 紅谷灘、秋水広場見学 12:00 昼食 14:00 八一起義記念館見学 16:00 八大山人記念館見学 17:00 日中友好会館 17:20 五湖大酒店 17:30 南昌市人民政府市長を表敬訪問 18:00 歓迎会 19:30 ホームステイ(ホストファミリー出迎え)	ホームステイ 引率者は日中友好会館 南昌市湖濱南路28号 TEL: 86-791-8520216
4	3月29日 (月)	8:30 日中友好会館集合 9:30 南昌第十中学校との交流 12:00 昼食 14:00 午後市内見学、買い物 17:00 ホームステイ(ホストファミリー出迎え)	ホームステイ 引率者は日中友好会館
5	3月30日 (火)	6:00 日中友好会館集合 6:20 南昌空港へ出発 7:55 南昌発MU5149便にて北京へ 10:20 北京到着 北京市内見学、故宮博物館、 天安門広場、万里の長城	北 京 泊 北京長安大飯店 北京市朝陽区華威里 27号 TEL: 86-10-67731234
6	3月31日 (水)	6:10 ホテル出発 8:30 CA151便で北京空港発 9:40 大連空港到着 11:00 大連空港発 14:00 関西空港着 14:40 関西空港発(専用バス) 18:30 高松着(アイパル正面玄関にて解散)	

※CA: 中国国際航空 MU: 中国東方航空

時間はすべて現地時間

使節団の活動状況

3月26日(金)

●高松～上海

昨年は新型肺炎SARSやイラク戦争により出発直前に中止を余儀なくされてしまったが、2年越しに就いて待ちに待った日がやって来た。今年も昨年と同じメンバーで出発する事が出来る。みんな事前研修会を6回経て準備は万端。少し緊張気味の団員12人だ。

一昨日、高松市長と松本理事長を出発あいさつの為表敬訪問し、「しっかりと見聞を広めてきてください、そして楽しんできてください。」という激励の言葉を団員にいただいた。出発の朝、見送りに来て下さっている保護者の方々に「1週間後の成長した子供さんを期待して待っていて下さい。」と団長の挨拶、そして、使節団としての中国訪問の目的を確認し、元気に手を振りいざ出発だ。

バスの中では早速元気な声が響き渡る。喜岡くんの指揮で「いつも何度でも」と「赤とんぼ」を練習。歌声は朝早いからか、なんだか頼りない。でも本番には強そうだから大丈夫。関西空港での出国手続きも無事に終り、いよいよ飛行機に搭乗だ。飛行機はあつと言う間に上海浦東空港に到着。驚くほどの広さ・大きさ・人の数に少し圧倒されつつ、無事に入国を済ませ、到着ロビーで出迎えに来ていた甘裕紅さん(中国滞在中同行して下さる南昌外事弁公室職員)とガイドの朱さんを見つけ、飛行場の外に。

中国滞在中は天気が悪いと予想していたが、晴れ渡る空(ラッキー)。バスに乗り、時速430キロのリニアモーターカーを横目に、高さ468mの東方明珠塔(テレビ塔)に到着。さすが世界3番目、アジアで1番の高さを誇るだけあり、見晴らしも素晴らしい。それにしても高層ビルが多いのに驚かされた。

本場の中華料理、第1日目の浦景大酒店でまるで香港のような夜景を見ながらの夕食だ。どんどん食事が並べられ、お皿が乗り切らないほどの料理が目の前に並び圧倒される。みんな初めは恐る恐る手を出していたがすぐに「美味しい!」の声。

食後は希望者のみ上海雑技団を見に行った。余りの人間離れの技にうわー、凄い拍手の嵐で大満足。

そしてホテルにチェックインして団長先生の部屋に集合。なんとこの日は鍋嶋くんの14歳の誕生日。部屋には甘さんが買ってきてくれたケーキが、『14』と型どられたローソクと『Happy Birthday』の文字。みんなでハッピーバースデーを歌い、おいしいケーキを食べてお祝いした。



松本理事長へ出発あいさつ



増田市長へ出発あいさつ



アイパル前での出発式

3月27日(土)

●上海

一夜明けて、中国初めての朝。

6時にモーニングコール、6時30分にトランクを部屋の前に出して朝食。バイキング形式で中華と洋食が並ぶ。どれにするかと迷いつつ、7時に出発。今日のガイドは建健さん。日本通の彼の合言葉は「吉幾三！（よし行くぞう）」。まずは、みんな待ちに待った上海動物園。さすが元ゴルフ場だけあり凄く広い。太極拳などを楽しむ上海市民の人と色々な動物を見ながら、「パンダ」のところに到着。急にみんなの歓声が響く。なぜならパンダが私たちの方に歩み寄って来てくれたからだ。その上、塀に手をつき立ち上がっているではないか！！カメラのフラッシュの嵐（まるでアイドルタレントだ）。



東方明珠塔にて



上海動物園にて



パンダかわいい！

続いて、中国の歴史的な美術品を集めた上海博物館に到着。1階から4階まであり、見学時間はあっという間に過ぎた。その後南京路に向かう。みんな広場で凧を揚げている。周りの雰囲気味わいながらもはぐれない様に移動。交通量も多いし信号を渡るのも一苦労。南京路の周りはデパートやお店が並ぶ。トロリーバスが人を掻き分け走っている。イベントをしていたり、休日でもあり凄い人の数だ。昼食は上海老街のレストランで。本当に何処に行っても食べきれない程の量が並ぶ。

次の見学は豫園と言って元々は旧中国人街に位置する中国式庭園であり、明の時代にあたる役人が、故郷を懐かしむ父親のために造園した庭園だ。歴史的な建物や庭園を眺めながら散策する。その後、外灘や黄浦江を見に行く。ここではあの高い東方明珠塔の全貌が写真に収められるスポットだ。売り子さんを振り払いながら移動し、お土産を買う。

夕食は「重慶小天」（火鍋で有名な店）。ここで上海最後の夕食をとる。ここも、店も広いしお客さんもいっぱいだ。上海駅前には汽車に乗る人達で、沸きかえっていた。時間があつたので待合室で南昌で披露するダンスの練習（中学生はさすがに若い。疲れは何処に）。ホームへの移動は全て階段だったので、みんなトランクを抱えて向かう。私達のコンパートメントへ乗り込み、狭い廊

下に荷物を運びいれ乗り込み完了。ここでガイドの建健さんとの別れだ。「吉幾三!! (よし行くぞう)」がもう聞けないのは残念。コンパートメントの中は2段ベットが机を挟み向かい合っている。狭い空間でみんな明日の南昌での準備をした。

3月28日(日)

●南昌

列車の窓からは畑や田んぼ、広がる緑、赤レンガの家が見える。生徒たちも南昌到着に向けて制服に着替え、トランクを整理。そうしている内に南昌に午前7時37分に到着。南昌外事弁公室主任の張知明さんをはじめ南昌市職員の方々の出迎えを受け、駅の外にでる。そして早速朝食をとるため、レストランに移動。移動途中に見える南昌市の町並みは思っていた以上に発展している。

朝食を終え、南昌市での催しなどに備え気を引き締めなおす。移動中、南昌の名前の由来を聞く。2500年前の皇帝が国土を拡大するために武將を送り、その武將は10万の兵を連れて来た。「南を盛んにするために来たから南昌」。滕王閣に到着。江南三大名楼の一つであり、唐の時代653年に建てられ28回も建築を繰り返し、全面修復をされ一般公開されている。建物は9階建てで、山の様な形(穩やかさ)、空(上)から見ると、空を飛ぶ鷹のようと言われている建物である。階段を上り、大きな湖や景色を見る。歴史的な説明を受ける中、借用料8円で王族の衣装を着て王座に座り、記念撮影を体験した。歴史的な建物を後にして、紅谷灘へ。ここは南昌の新区で放送局などが立ち並ぶ中、南昌市役所が新しく移転してきた場所である。その横に秋水広場があり、南昌市民の新しい憩いの場になっている。数多くの噴水があり、その噴水からの水が、暑い位の私達にひと時の涼をくれた。

午後は南昌一の繁華街中山路を眺めながら八一起義記念館に到着。ここでは現代中国の礎を築くきっかけとなった歴史的武装蜂起の一部始終が写真・絵画・記録文書等で展示説明されていた。次の八大山人記念館は、明代末期から清代初めにかけ活躍した書画の巨匠、八大山人(朱道朗)が隠遁した場所である。周りは田園風景の中の川沿いにあり、その風景と書画と庭が合っていて静かなながらも力強い書画の素晴らしさに触れる事が出来た。

バスで日中友好会館へ移動。玄関には『熱烈歓迎』と書かれた看板に、南昌での歓迎振りを益々感じた。友好会館で自己紹介等の練習をして、市長表敬のある五湖大酒店に到着。みんなどき



上海博物館にて



紅谷灘 新南昌市役所



日中友好会館玄関で



南昌市人民政府市長を表敬訪問

どきの中、1人ずつ自己紹介をする。ハキハキと挨拶が上手に出来た。団長と李豆羅市長の話を聞いている内に和やかに市長表敬終了。会場を移し歓迎会が始まった。横一列に向かい合い着席した。机には沢山の花が生けられ、その回りには薔薇の花びらが散らされている。凄い！！飾りだけでなく食事も凄かった。フレンチの様な中華料理に、みんなの「美味しい」の声が聞こえる。歓迎会では南昌市の花が印刷されたネームカードに、書家としても有名な李豆羅市長にサインをしてもらい、和気あいあいと時間が過ぎていった。

友好会館に場所を移すと、生徒たちが今日から2日間お世話になる、ホストファミリーが迎えに来てくれていた。挨拶の後、次々と団員の名前が呼ばれ、ホストファミリー先の中学生が手に手を取ってそれぞれの家族の所へ導いてくれた。みんなこれから始まる事に緊張顔だ。最後の団員を見送りながら、引率3人は少し寂しさを感じながら、「みんな大丈夫、頑張る」と心の中で祈った。

3月29日(月)

●南昌

朝方少し雨が降っている、今日はいよいよ第十中学校訪問の日。午前8時30分に友好会館に集合し、9時頃に第十中学校に到着した。雨は止み、空には太陽が顔を出し始めていた。バスを降りると、門の所で第十中学校の生徒さんたちが「歓迎！」「歓迎！」と言いながら花束を振って出迎えてくれた。校長先生を初め、中学校関係者と引率3人の挨拶などをした後に友好の証に署名を団員全員で行った。第十中学校100年の歴史の展示を見学し、この学校は長い歴史と優秀な学校だと再確認した。いよいよ交流会が始まった。第十中学校生徒の司会で、まず第十の合唱が始まった。中国の歌の次になんと「さくらさくら」を日本語と中国語で歌ってくれた。こちらもソーラン節・ストリートダンス・合唱を披露し、本当に元気に踊ったり歌ったり出来た。第十の生徒は琵琶や琴や歌など、プロ級の腕前を披露した。われわれも衣装を変えて「桃太郎」を披露。みんな衣装などにも興味津々、笑いもあつたりして拍手の嵐で大成功。日中入り混じりのゲームで大爆笑し、遂に高松まつりを披露する時が来た。第十の先生や生徒達に「一緒に踊りましょう」と声を掛けると、みんな円に入り楽しく踊ることが出来た。本当にみんな力を出し切っ



雨の中、第十中学校生徒の歓迎



第十中学校での懇談会

て素晴らしい交流が出来た。

その後、第十中学校に歓迎昼食会を開いていただいた。午後は第十中学校では授業があるので、みんなを見送った。ホームステイの迎えまで時間があるので、大型スーパーで買い物を楽しみ、待ち合わせ場所で待っていると、制服姿が珍しいのか人だかりができた。中には少し日本語の出来る人がいて、話しかけてきた。17時過ぎに友好会館に戻り2日目のホームステイが始まった。夕方、引率者3人は第十中学校の余先生の案内で、ホームステイ先の三家庭を訪問した。どの家庭でも温かで、優しく団員達を受け入れてくださっていて心から感謝した。



第十中学校での記念撮影



みんなで高松の一合まいたを踊ったよ。



すばらしい書道をいただきました。

3月30日(火)

●南昌～北京

今朝はうす曇、まるでホストファミリーとの別れを暗示するような天気だ。6時に友好会館に集合。ホストファミリーの方達に送ってもらい、次々に集合して来た。みんな本当の家族の様にお父さんやお母さんに荷物を運んでもらったり、家族との別れを惜しみながら話しをしたり、抱きしめあったりと、みんな家族のようだ。

飛行場に入り、チェックインする時に南昌市外事弁の職員の方達やホストファミリーの方達は私たちが見えなくなるまで手を振って見送ってくれた。南昌の皆さん本当にありがとう！謝謝！

7時55分発の飛行機で2時間足らずで首都の北京に到着。さすがに北京空港はとても広いし、人でいっぱい。北京でのガイド王さんのとても上手な日本語を聞きながら、晴天の北京を観光。王さんの説明によると、北京は地震、台風、梅雨、火山が無くてとても乾燥している。黄砂も多く、そのためにポプラや柳や松や槐等を街路樹に植えている。また、現在の北京は、ここ五年で急激に増えた車の数に駐車場が追いつかず、大変問題になっている。2008年のオリンピックのため、歴史のある古い町並みがどんどん整備されている。北京市内に入り市内見学しながら天安門広場に到着。圧倒的な広さと凄い風の中、みんなで記念撮影。そのまま進み、故宮博物館に入ると立派な歴史的建造物が次から次へと現れる。保護の為、柵の外からしか見れないが、屋根やすばらしい装飾等、この建物の重要さを感じずにはいられない。そこには大きな甕があり、防火用に使用したそうだ。



天安門広場にて



万里の長城にて

580年の歴史ある故宮を後にし、一行は万里の長城を目指す。英気を養いながら2時間ほどバスに揺られていると前方に万里の長城が見えてきた。5000kmもある終りの見えない長さ。本当に上空から見ると龍に見えるだろう。今日の夕食は本家本元の北京ダック。料理が出てくる前に団員1人1人が今回の訪中の反省や感想を発表した。1週間でみんな精神的に成長した様子がかがえる。遂に北京ダック登場。丸ター羽をコックさんが切り分けてくれた北京ダックを満喫、中にはサソリの素揚げも恐る恐る口にして、意外に美味しいと声があがる。ホテルに着いた時にはもう9時を過ぎていた。明日は早いから荷造りをして早めに就寝。

3月31日(水)

●北京～高松



さようなら また会う日まで

今日は最終日。遂に日本に帰国する日がやってきた。5時30分ホテルのロビーに全員集合。

ホテルで朝食のお弁当を受取り、バスに乗り込む。飛行場は出国を待つ人で一杯だったが、やっとチェックイン。6日間同行してくれた甘さんとはここでお別れ。みんなにとって優しいお姉さんであり、あるときは交渉人、又ある時は中国語の先生と七変化。甘さんには6日間本当にお世話になり、謝謝！ 私たちは搭乗時間まで中国最後の買い物を楽しみ、時間が来てタラップの前に立つと楽しかった日がよみがえる。

大連経由で関西空港に14時に無事に到着。予定より30分早く関西を出発。途中津田のインターで

久しぶりのさぬきうどんを食べる。だしの香りに吸い寄せられ、全員でなつかしの味を楽しんだ。午後6時半にアイパルに到着。大勢の方がお迎えに来られ、角田富雄理事の温かい迎えの言葉、そして生徒代表が中国での貴重な体験を生かしていく決意をのべ、みんな笑顔で解散となった。お疲れ様、謝謝！ 再見！

感 想 文

虹色の噴水のむこうに南昌市の発展が見える



(財) 高松市国際交流協会
常務理事
藤本 良志美

南昌市の近代的な秋水公園に立った私は、スピーカーから流れるワルツのメロディに合わせて高く低く舞い上がる虹色の噴水とその向こうにそびえる2棟の新しい市庁舎を目の前にして、私の最初の訪問以来、年々発展を続ける友好都市・南昌市に驚きを感じました。日本とは政治体制が違うのですが、この地区を市庁舎と緑地公園にする都市計画を決定すると、すぐさま周辺の住人は立ち退き、その区域は立派に整備され、見違えるような官庁地区になることに、中国の自治体長の権限の大きさを強く感じました。当日は日曜日だったので、市庁舎見学が出来ず残念でしたが、秋水公園を家族連れで散策する大勢の南昌市民の人達がいて、自分たちの市を誇らしく思っている様子がうかがえました。

「有朋自遠方来不亦楽乎」(朋あり遠方より来る亦楽しからずや)。これは、南昌市第十中学校での中日交流会において、中学生の許君が私達のために披露してくれた書道です。

私にとっては、第十中学校訪問は、2度目だったので、許君からその書を受け取った時は感慨ひとしおでした。第5回中学生訪中団の団長としてこの学校を訪問した時にお会いした数人の先生方が、当時の写真を持って懐かしそうに声をかけてくださったり、胡校長先生から新しい校舎などを案内していただき、また、設立100周年の歴史をお聞きしたりする中で、古い友人を大切にする南昌の人達の心が強く伝わってきました。

また、今回、第十中学校交流会での高松側の出し物、鬼が島の伝説劇「桃太郎」が大変好評だったのを大変うれしく思いました。角田部長の提案の劇を、全員が熱心に練習し、各自持参した衣装を着けての寸劇は、高松市をアピールするのに十分で、校長先生をはじめ第十中学校の皆さんから大きな拍手をいただきました。

さて、南昌市での市長表敬訪問と歓迎夕食会では、まさに「熱烈歓迎」を受けました。例年になく、私たちは五湖大酒店の立派な部屋で李豆羅市長を表敬訪問しました。さらに、歓迎夕食会も素晴らしい花飾りのテーブルでフランス風中華料理のおもてなしでした。そして、李市長は歓迎挨拶の後、気軽に団員たちと一緒にカメラに収まったり、また、書道家でも有名な市長は、各団員のネームカードにご自身の署名をしてくださるなど心配りをしてくださいました。その席で、次代を担う中国と日本の中学生達が互いに交流を図り、文化を越えて理解し合うことの大切さを李市長と確認し合いました。



李豆羅南昌市長を表敬訪問

第十中学校の生徒宅でのホームステイ2日間は、団員達にとって素晴らしい経験になりました。中国の家庭に泊めていただくのは皆初めてでしたが、香川県民のお接待のおもてなし以上のやさしさを感じたと思います。団員達がこの訪中で生まれた南昌市中学生との友情の絆を絶やさず大きく育てていくことを望んでやみません。

訪中直前に団長に任命された私は、好奇心あふれる元気な団員の中学生12人と、引率者2人の協力を得て、5泊6日の訪中を実りあるものに出来たことに心から感謝しています。

また、この訪中に際し、南昌市での活動やホームステイのお世話をしてくださった南昌市および第十中学校の皆様にご心からお礼を申し上げます。

初めての中国の旅を経験して

～ことばの壁は、心と心のつながりで～



高松保健所保健センター
保健師長
吉井 由美子

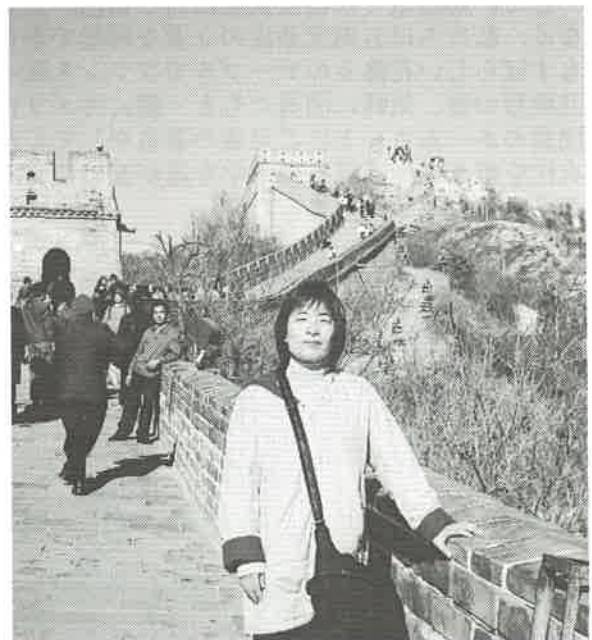
この研修の救護は、約1年前の1月に上司からの推薦によるものでした。海外での救護のため、病気・怪我のときの対応に多少不安を感じましたが、中国にはこれまで行ったことがなく、古い歴史と雄大な大地をもつ国に魅力を感じていたので、喜んで参加させていただくことにしました。そして、事前研修を進めていくうちに、期待もどんどん膨らんできましたが、SARS・イラク戦争で出発1週間前に中止となり、とても落胆しました。しかし1年後、また同じメンバーで参加できるようになり、出発の日を指折り数えながら待っていました。

そして出発当日。前日の雨とはうって変わった晴天のもと、旅立ちを迎えた時には、仕事としての「救護」のことが気にかかりつつ、心がウキウキしていました。

飛行機で一路中国へ。空から見る中国は、日本とほとんど変わらないように映りましたが、飛行機から降り、初めて目にした上海は、想像していた以上に高層ビルが立ち並ぶ大都会で、刻一刻と発展を続ける活気溢れる街という印象でした。電気を惜しみなく使い、街全体をカラフルに彩る夜景は、まさに夢の中にいるようで、目をパチクリさせるばかりでした。本当に衝撃的な中国の1日目でした。2日目以降の上海博物館、天安門広場、万里の長城や町の中の人と車の大混雑、中華料理のボリュームなど、中国のスケールの大きさに驚かされるとともに、すべてに残ることばかりでした。

けれども、この研修の中で一番印象に残っているのは、南昌の友好会館近くの雑貨店へ買い物に行った時の出来事です。その店でおいしそうなお煮たまごを見つけ買うことにしましたが、中国語は話せないし、英語も通じず困ってしまいました。自分の思いを何とか伝えようと、身振り・手振りと顔の表情で、やっとのことで伝えることができた時には、本当にうれしかったです。言葉を使わなくても、気持ちを伝えることができると実感しました。代金の「1元」を渡し、心の底から「シェシェ」と店主に伝え、お互いにニコニコしながら別れました。その翌日、店の近くで彼女を見かけると、すれ違いざまに彼女が「你好」と声をかけてくれました。あわてて私も「你好」と返しましたが、私たちのことを覚えてくれたことに、びっくりすると同時に、温かいものが込み上げてきました。ほんの些細な現地の方との交流ですが、中国をまた訪れたいという気持ちをいっそう強くしました。しかし、もう少し中国語を勉強し、今よりも日常会話ができるようになると、中国の方とのコミュニケーションができ、もっと楽しい中国の旅になることと思います。ぜひ、実現したい私の夢です。

この研修で、お世話になりました甘さん始め、流暢な日本語を話すガイドの方々、また、有意義な交流会を開催してくださいました南昌市人民政府・第十中学校の皆さんに感謝するとともに、この機会を与えてくださいました高松市国際交流協会の方々にお礼申しあげます。



万里の長城 女坂にて

未来を担う子供達と共に



(財)高松市国際交流協会
事務局員

平山 万友美

第12回目を迎えた中学生訪中親善使節団の引率として、中国を訪問し、素晴らしい引率メンバーや12人の団員と友好都市等中国の人との交流をする機会を与えてくださって本当に感謝しています。日中関係の未来を担うこの子達が中国での異文化体験をする事により、何かを得てそれを将来に活かし、日中の未来を創造していく、そのステップに立ち会えるという、喜びが私の中に起こる半面、不安が心の中を交錯していました。

3月26日出発の日です。大勢の方に見送られ2年越しの私達15人は中国に向けて旅立ちました。私自身は中国に訪れた事が無く不安でしたが、上海に南昌から迎えに来てくれた、甘裕紅さんの顔を見たら安心し、この6日間はきっと上手くいくと確信しました。上海では発展していくパワーを街中から感じ、さすがに中国随一の経済都市と感心しました。朝、公園等で太極拳などを行っている人や街中から湧き出る活力を身近に感じる事が出来て、元気をもらう事が出来ました。

南昌行きの夜行列車の中では、この旅最大の山場が明日から控えていると言う現実に緊張せずにはられませんでした。あっという間に第十中学校訪問の日がやってきました。熱烈な歓迎を受けながら学校に足を踏み入れると色とりどりの花壇や噴水があり、まるで大学。子供達はホームステイ先の生徒たちと手をつないで和気あいあいと会場まで向かいました、昨日までのごこちなさは全然感じられませんでした。交流会が始まり、第十中学校生徒の歌や踊りや演奏等素晴らしくとても感心しました。こちらも発表前に喝を入れ、いざステージに。歌も踊りも桃太郎も本番ではみんな力がすべて出しきれたと思います。私は思わず感動で涙ぐんでしまいました。みんなは親善大使そのもので、私自身こういう経験や体験をまじかに感じる仕事に携われて本当に幸せだと思いました。

北京では南昌での緊張を一気に吹き飛ばす様に歴史的建造物を見学し、今までの交渉力を生かしてみんな思い思いのお土産を手に入れました。

本当にあっという間の6日間でした。みんな病気やけがもなく一緒に訪中を楽しむ事が出来、みんなからいろいろな事を勉強させてもらったと思っています。12人のみんなこの訪中での経験を活かして、これからの活躍を期待しています。最後になりましたが、団員を温かく送り出してくださいました家族の皆様、今回の訪中に関して最後まで御配慮いただいた甘さん、中国での手配をしてくださった南昌市外事弁の皆様、一緒に同行していただいた藤本団長と吉井先生、「ありがとうございました。謝謝大家！」。



南京路で甘さんと一緒に

「謝謝！ありがとう」



高松市立桜町中学校
中村 綾香



ホームステイ先の親戚と一緒に

「おお、中国だ！！」飛行機から下り、中国の地に立った私が言ったのはこの一言でした。去年は新型肺炎SARSの影響で、残念ながら中止になってしまった中学生訪中親善使節団派遣も、今年ようやく実現できてとても嬉しく、胸の高まりも早まるばかりでした。見渡す限りの高層ビル。私の想像をはるかに越えた近代的な建物に、ただただ圧倒されていました。

今回の訪問で私が一番心に残った事は、南昌中学校の生徒の家庭へのホームステイです。私にとって生まれて初めてのホームステイで、不安と緊張で胸がいっぱいでした。たった一人で、しかも日本語と中国語の言葉という大きな壁がある所で、果たして2日間もやっていけるのだろうか…？と、思いつつ、上海の観光を終え、私はドキドキしながらホームステイ先の方々が待っている部屋へ入りました。そこで私を迎えてくれたのは、温かさ溢れる人達ばかりでした。私の荷物を真っ先に持ってくれたホームステイ先のお母さんやお父さん、家までの帰り道に喋りかけてく

れたその娘さん。その瞬間、「ほっ」とする感じがして、不安の代わりに安心感がどっと押し寄せてきました。

1日目の夜は、パソコンをしたり、私が持って来た写真を一緒に眺めたりしました。ホームステイ先には、DVDや人形など、たくさん日本の物がありました。その子の家はマンションでしたが、マンションとは思えない程とても広く、綺麗でした。テレビを見ていると、お母さんがお菓子を出してくれました。しかし、日本で私が食べるようなスナック菓子ではなく、ピスタチオや海苔、ピーナッツなどで、食べ物への意識の違いを感じました。

2日目の夜はだんだん慣れ、ホームステイ先の家族とも打ち解けてきて、一緒に写真を撮ったりゲームをしたりしました。お母さんやお父さんともたくさん話すことができ、楽しかったです。夕食を食べに行った店では、お父さんの友達も来ていて、その方々も私をすごく歓迎してくれて嬉しかったです。一つひとつの事がとても楽しくて、少しでもたくさん話したいと思い、時の経つのも忘れて、いつの間にか夜遅くまで話をしていました。

3日目の朝。あっという間に2日間のホームステイ期間が過ぎ、別れの時が来てしまいました。ホームステイ先のお母さんが作ってくれたご飯はとても美味しく、「ヘンハオチャー!! (とても美味しい)」と言うと、とても喜んでくれました。お父さんは、雨の日に「どうぞ」と言って傘を貸してくれたり、友達は、中国の事をいろいろ教えてくれたり、一緒に遊んでくれたり、言葉を通訳してくれたり、みんな私にたくさんのお話をしてくれました。私が日本の事を話すと、真剣に聞いてくれたり、日本語を真似て話したりして、日本の事にも興味を示してくれて、とても嬉しかったです。そしてあれだけ緊張していた私も、最後には家族のみならず仲良くする事ができ、「このままここに住みたいなあ」と思うくらいでした。それでも時間は待つてはくれず、別れの時は刻一刻と近づきばかり。集合時間10分前となり、私はホームステイ先の方々と初めて歩いた道を、また同じように友好会館まで歩いて行きました。それは、初めて歩いた時のあの緊張と不安で張りつめた感覚とは違い、楽しかったなあと思い返しながら、どこか切なく寂しい感覚へと変わっていたような気がします。私がバスに乗るときに、「Welcome to China!!」と言ってくれて、本当に嬉しかったです。別れは寂しくて、すごく泣いてしまいました。最初に気にしていた「言葉の壁」も、本当は関係ない事なのだと思えました。そして、ホームステイが出来た事をとても嬉しく思えました。実質ホームステイが出来たのは、昼間の活動を終えた夜の間ではあったけど、とても貴重で楽しく、充実した時間だったと思います。これからも手紙やメールを通じて交流出来たらなあと思っています。

今回の中学生訪中使節団では、私の予想をはるかに上回る発展的な都市計画と、深い歴史を持つ中国独自の建造物を自分の目で見られた事の喜びと、中国の人の持つ優しいけれど決して甘えない、強く優しい人情に触れ、ただ訪問するだけでなく、中国の人が持つ自立心や優しさをも、学ぶ事が出来ました。最後に、こんな貴重な体験をさせて下さったお母さんやお父さん、引率員の方々、角田さんや白井さん、何さん、一緒に行った12人の友達、その他お世話になった方々そしてホームステイ先の方々、本当にありがとうございました。【謝謝!!!】

心のつながりと心の温かさ



高松市立玉藻中学校
千葉幸絵

中国へ出発する日を私がどれだけ楽しみにしていたか、誰も分からないだろう。そう、私自身も鮮明には覚えてはいないのだから…。ただ1つ分かるのは、憧れていた中国に、とてつもなく大きな期待を寄せていた事だけだ。私の頭の中で描いていた中国は、実際に存在する中国よりはるかに小さかった。町も小さかったし、人の数も少なかった。そんな小さな中国を思い描いて「中国って、大きいんだろうなあ。」と、私は思っていた。

中国に着いてまず最初に思ったことは、「どこからが中国なんだろう…」だった。前回の使節団員の人は報告書に「友達と「せ～の」で中国の一步を踏みだした」と書いてあったが、一体どこからが中国なのか分からない。そんな疑問を抱きながらバスへ乗り込んだ。バスの中から見える上海は、私の想像とは全く違っていた。第一に物の大きさが全然違っていた。何もかもが大きくて、華やかで、高松とは比べものにならない凄さだった。そこで初めて、中国に来たことを実感した。観光ガイドの中国人ケンケンも凄く面白いんで、別れるのがつらかった。

「南昌はもう少し田舎だろう。」と思って列車の中から覗いてみると、高松よりビルが高かった。人も多かった。料理も辛かった。(こんなに凄いとくと友好都市なんか結んでいいのかなあ。)と、友達と話したぐらい都会だった。

ホームステイ先のインちゃんとその家族は、凄く優しくかった。お母さんは中国語しか喋れなかったのだが、心が繋がっているようにも思えた。インちゃんとは英語で話した。インちゃんは凄く英語が上手くて、中国の友達とも英語で喋っていた。私の下手な英語をすぐに理解してくれたお陰で、会話に困ることは無かった。そして、インちゃんは私に「英語うまいね。聞きやすい。」と、いつてくれた。その時、私の中で詰まっていたものが、すっと取れたような気がした。あれだけ「ホームステイはなんとかなる」と思っていたのに、言葉一つでこんなにも緊張が解けるんだなあと思うと、嬉しい反面、この世界の中でどれだけ今の自分がちっぽけなものなのかを改めて感じてしまい、哀しいような気もした。お別れの日の朝、私は2回も泣いてしまった。「泣かないでおこう」という気持ちとはうらはらに、涙がどんどん溢れて、もう自分ではどうすることもできなくなっていた。最後に家族皆で抱き合っって別れた。哀しかったけど、これで終わりじゃないんだと思うと自然に涙も止まって、皆と笑えた。

5日目。とうとう万里の長城に登る日がやってきた。ドキドキして緊張して、登る前のことはあまり覚えていない。その日は風が強く、男坂に登るには少し危なかったらしいが、「折角ここまで来たんだから、男坂に登りたいなあ」と言ったら友達がいいといってくれたので、念願の男坂に登った。登るときは、怖くて怖くて泣きそうだった。けど、それ以上に景色が綺麗で感動した。降りるときも、怖くて半泣きになりながら、滑ったりつまずいたりしながら皆と降りられた。

私は今回の中国訪問で本当に沢山のことを学んだ。学年を超えての交流、国境を超えての交流。そこには、沢山の壁があった。だけど、皆と一緒にだったからこそ乗り越えられた。たくさんの楽しい思い出が作れた。もし、私のことを忘れそうになったら、「中華料理を一番多く食べていた人」を思い浮かべてほしい。

最後になりましたが、団長先生、平山さん、吉井さん、それに、一緒に過ごしたみんな。本当にありがとう。このメンバーじゃなかったら、ここまでいい中国の旅にはならなかったと思う。

今、私は思う。たとえ、国籍が違っていても、言葉が違っていても、皆、同じ生物。皆、同じ人間。「共存」という言葉が生まれたときから、私たち人間は心どこかで繋がっていた。

そう、私と中国のお母さんのように。



万里の長城 男坂にて

「感動を味わった6日間」



高松市立協和中学校
鍋嶋 広樹

3月26日から31日までの6日間、「中学生訪中親善使節団」として初めての中国。そこにはいろいろなものがありました。

昨年はSARSやイラク戦争などの影響で残念ながら行くことはできませんでした。しかし、今年は3月26日、予定通りに無事出発することが出来ました。

飛行機から降りた上海の姿は、中国での一番最初の感動となりました。想像以上に発展している大都会の街並みや高くてきれいなテレビ塔にびっくりしました。そしてその日の晩、甘さん（南昌市職員）が僕の14歳の誕生日を祝って、わざわざ大きなケーキを買って来てくれました。それにも大感激しました。

次の日は待ちに待った上海動物園。建健さん（上海のことならなんでもOK！ナビゲーター建健）を先頭に園内を見学してまわりました。機嫌がよかったのか、パンダ君たちは僕たちを出迎えてくれました。その後、上海の街を探検し、お世話になった建健さんに別れのあいさつをして夜行列車に乗り込み、上海を後にしました。無事南昌に着いたのが朝の7時半。そこから南昌での旅が始まりました。南昌市の李豆羅市長や役員の方々からの熱烈な歓迎を受け、日中友好会館へ行くと、そこにはホストファミリーの姿が…。そして南昌の変わりゆく風景を楽しみながら、家に連れて帰ってもらい、家族の温かい歓迎を受けました。ホームステイの1日目の大半は緊張していたせいか、相手（ホストファミリーや焦因斯迪君）に聞かれたらその事について話すだけでした。しかし、翌日の第十中学校訪問の時から僕の緊張もほぐれて来て、その日の晩はいろいろな事について話す事ができるようになりました。でも会話といっても自分が知っている限りの英語をジェスチャーを交えながら話すだけです。正直な話、途中で「日本語がしゃべりたい！」と思ったこともありましたが、しかし現実は一ひとりごとか「あつっ！」などの反射的に出てくる言葉、もしくは「これは日本語で何というの？」と聞かれた時ぐらいでした。ところが夕食のレストラン先でたまたま出会った団員に会い「やっと日本語が話せる～!!」と思った時はかなり安心できました。

そしてホームステイ先で驚いた事は、中国のテレビ番組やアニメです。現在の中国では、「クレヨンしんちゃん」「ドラえもん」「名探偵コナン」さらに「ポケットモンスター」などが流行っていました。内容は同じ物で、声だけ中国語に吹き替えられているものが多かったです。とてもびっくりしました。焦因斯迪君もこれらの番組が大好きで見せてくれました。



上海の豫園にて

ホームステイが2日間というとても短い期間で残念でしたが、とても充実した内容でよい経験になりました。なによりも僕に優しく接してくれたホストファミリーの人たち、そしてこの6日間のみならず1年前からお世話になった前団長の角田さん、吉井さん、平山さん、今回団長の藤本さん、この6日間おもしろいお世話になった甘さん、みなさんありがとうございました。そして団員のみんな、どうもありがとう！

謝謝！

忘れられない6日間



附属高松中学校
西山七穂

中国へ行くことは私にとって幼いころからの夢でした。とはいっても私が憧れていた中国という国のイメージは、道路での自転車の洪水、山水画の様な風景、長い歴史と伝統に基づく国という抽象的なものでした。今回の研修旅行ではこれらのイメージが具体化され、また新しく書き換えられたように思います。私は中2の時にこの旅行に参加することを決意し、準備を進めてきましたが、出発のわずか1週間前にイラク戦争とSARSのため中止となってしまいました。だから、今回特別にもう一度私たちにチャンスが与えられると聞いた時、うれしさとともに、去年の悔しさの分までがんばろう、という気持ちがこみ上げてきました。

そして約1年半にわたり待ち続けていたこの6日間は、振り返ってみれば本当にあっという間でした。

上空から見た中国の広大さ、上海という大都会におけるスケールの大きさ（上海市内には100メートル以上の建築物が2000以上もあるそうです）、初めて口にした本場の中華料理の美味しさ、上海魔术団（雑技団）の同じ人間とは思えないようなすばらしい演技、古くからの歴史を持つ大建築物・建造物など、とにかく全てに圧倒されました。しかし、その中でもやはり現地の人との交流ほど心に残ったものはありません。日本語がとても上手な4人のガイドさん、高松市の友好都市である南昌市からの職員としてずっと私たちにつきそってくださった甘さん、李豆羅南昌市長はじめ南昌市人民政府の皆さん、南昌第十中学校で知り合った先生や生徒さん、そして私のもうひとつの家族―蔡家。

この旅行で私は初めてホームステイを体験しました。蔡家の娘君庆は私よりも3つも年下なので、最初は話が合うかどうかかなり不安でしたが、彼女は私のことをいつも気にかけてくれたので少しも退屈しませんでした。お父さんもお母さんも本当に優しく、言葉が通じない時でも辞書などを使って必死に私に話しかけてくれました。また、食文化の違いや生活様式の違いなどをじかに目の当たりにして驚くことも多かったです。短い期間だったうえに、完璧にお互いの言いたいことが伝わったわけではありませんでしたが、話す言葉が違い、しかもそれまで全く知らなかった人たちとでもこんなに仲良くなれるんだと思えた最高の時間でした。

またその一方で、私はもっと英語を勉強しなければならないことを痛感しました。中国の中学生たちは英語が非常に堪能でした。というのも、

中国の英語教育は日本とは違い、小学生のころから始まるそうです。これから重要視されてくるであろう「国際交流」の視点から考えると、日本の英語教育はもっと見直されるべきではないでしょうか。国際化の進むなかで日本が持つ大きな課題のひとつであると思います。

今回の研修旅行で私は数え切れないほどの思い出をもらい、そして勉強させられました。出発が1年延びてよかったとさえ感じています。いつかもう一度中国を訪れる時には、もっと英語や中国語を上達させていたいし、もっと深い国際交流をしたいと思っています。第12回訪中親善使節団の一員として活動できて本当によかったです。お世話になった皆さん、多謝！



ホストファミリーの蔡君庆さんと
第十中学校の余先生と一緒に

日本と中国の違いについて学んだこと



高松市立木太中学校
神内玲美

初めて中国に行って、私が出たもの・印象に残ったものはたくさんありました。

まず一つ目に食事でした。本場、中国で食べた中華料理は辛いものと油っこいものが多くて、日本の中華料理屋さんとはぜんぜん違う味でした。飲み物はSpriteやコーラが主で炭酸系がいつもでてきていました。それに、日本の食事の仕方とは少し違っていました。中国の人は皆、テーブルの上に鶏肉の骨や食べ残しをおいていたのです。昼食や夕食などの食事先やホームステイ先でも食べる物は多いのに、おき皿は一つしかありませんでした。おき場がなくておき皿に入れたまま食事をとっていると、ホームステイ先のお母さんが「テーブルの上においていいよ」と言ってくれました。日本ではテーブルの上に自分の食べ残しなどをおくことはないのです、少しとまどっていました。しかし、テーブルの上におくということは、中国ではあたり前の食事マナーなのです。日本と中国の違いは、食べ物がちがうだけでなく食事の時のマナーもちがうことがわかり、驚きました。

次に、街の様子についてです。上海・南昌・北京、どの街も高い建物がたくさんありました。その建物は、どの建物も〈ビル〉という感じではなく、ほとんどが〈ホテル〉や〈マンション〉という感じでした。中でも、マンションが一番多かったと思います。そして、日本のマンションとは違い、ベランダがある建物は一つもありませんでした。洗濯物は部屋の窓から物干し竿を突き出しているところもありました。私は、中国の家はマンションばかりというよりも日本のように一戸建ての家が多いと思っていたので、マンションばかりの中国の街には驚きました。

そして、もう一つ驚いたことは車や自転車の数です。初め、3車線のことにも驚きましたが、なんといっても人の数の多さです。特に車と自転車が特別多くて、しかも皆信号無視。車の数だけでもすごい数なのに、ものすごいスピードを出して運転しているし、自転車の人も信号がない所でも車道に入ってきて普通に渡ってるし…。

ホームステイをした2日間で、私を公園や商店街に散歩に連れて行ってくれましたが、王玄璇ちゃんがいなければ恐くて1人で道路も渡れなかったと思います。日本でもたまに信号無視をしている人を見ますが、中国は日本なんか比べものにならないくらい車の数と自転車の数だったので、見るだけでドキドキしていました。

ホームステイ先で一番大変だったことはやっぱり会話をする事でした。王玄璇ちゃんは今13歳、私の方が2つも年上なのに英語がものすごく上手でした。しかも、会話のほとんどが英語で正直、まともな会話はあまりできていなかったと思います。「言葉の違い」と言うものがこんなにも大きな壁になるとは思っていなかったので、1日目からすごく不安になっていました。しかし、言葉がうまく通じなくても、皆優しくしてくれて、少しずつ打ちとけていくことができました。2日目の夜は寝る前に王玄璇ちゃんとお互いのクラスメートの話をして盛り上がることができました。

国が違って、言葉がうまく伝わらなくても、仲良くなれて友達になれる。この使節団に入って、6日間中国という国にいて、日本と中国との歴史・文化・言葉・食べ物などいろいろな違いを見て、聞いて、感じて、とても良い体験ができたと思いました。初めて違う国の子と友達になることができたし、中国のお宅にホームステイすることもできました。そして大切な友達、いろいろな経験ができて普通の旅行で行く何倍ものことを得られたと思います。この使節団に応募して本当に良かったと思います。

最後に、6日間お世話になった皆さん、仲良くしてくれた皆、いつかまた会えたらと思います。本当にありがとうございました。



上海のレストランで おいしかったよ！

私の中国体験記



高松市立山田中学校
歳 森 ふくこ

日本を飛び立ち、最初の訪問地、上海を見わたして見ると、中国の人たちは、日本人と、顔や、体格が似ていて、漢字も普段見慣れているので、最初は、「あれ、そんなに日本と変わらないじゃん。」と思いました。それも時間がたつにつれて、いや、中国は日本とは違うなと思いました。そのなかで、特に印象深かったのは、中国のスケールの大きさと、中国の人たちのすばらしさです。

まず驚いたのは、最初は「海かな？」と思った、滕王閣から見た川です。ガイドさんが、「これは川ですよ。」といわれ、「えっ、橋は見えるけど、向こう岸は見えないのに？」と、中国の大きさにびっくりしてしまいました。唐代皇帝太宗の弟滕王の別荘の、「江南三代名楼」のひとつに数えられている滕王閣は、高さ57mという高さもさることながら、歴史的な物語の彫刻にも施されていて、その壮大さに圧倒されました。

毛沢東主席の肖像が掲げられている天安門広場は、今まで写真やテレビで見ていたので、前から一度見てみたかったところでした。紫禁城では、明・清代の皇帝の王座なども見ることができて、とても貴重な体験ができました。本当に、どれもこれも私の想像を超えるスケールで、やっぱりここは中国だなあと思いました。また、万里の長城も、私の目では見られぬほど遠くまで続いていて、中国の雄大さを感じました。

そんな歴史ある建造物より、もっとインパクトがあったのは、ホームステイでの体験です。ホームステイ先の李婕珉さんは、私と同年で、日本のアニメが大好きでした。彼女と彼女の友達と話しているときに、「さくら」という名前がついた登場人物をさして「意味は何？」と聞かれたので「それは、日本を代表する花の名前だよ。多くの日本人は、その花が好きだよ。」というと、「すてきだね。」とっていました。彼女との会話は英語でしたが、彼女はすごく英語が上手で、私の英語力では、伝えるどころか、話を理解することすら大変でしたが、彼女は、筆談などで私が理解できるまで伝えようと一生懸命でした。「中国の子供たちは、みんな必死に勉強している」と、前から聞いていましたが、彼女もそんな子供たちの1人なんだなと少し自分を振り返って反省しました。また、ホストファミリーのお母さんや、おじいさんやおばあさんも、「すみません、こんなにたくさん食べられません。」といっても、どんどんお皿に料理をついでくれたり、私の重い荷物を「いーよ、いーよ。」と持って下さったり、本当に最初から最後までやさしく、笑顔で、あたたかく接してくださいました。本当に言葉が通じなくて御礼がきちんと伝えられなかったのが残念で、残念でなりませんでした。

私は、この地で多くの体験をし、言葉では表せない多くのものを手に入れました。それは、交流協会の方々や、引率の先生方や、団員の皆さんのおかげです。こんな貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。



ホストファミリーの李婕珉さんたちと

中国で学んだこと



高松市立桜町中学校
和泉志穂

チャイナエアラインに乗り込んだ時、いよいよ中国に行くんだ…という気持ちになりました。イラク戦争とSARSで出発が1年延期になったこと、事前研修のこと、見送ってくれた家族のことなど、いろいろなことが頭をよぎりました。これから5泊6日、どんな旅になるのだろうか？

中国は、私が想像していた以上に進んでいる国でした。まず、建物の高さに驚きました。それなのに、全体が広々としていて、さすが国土面積が日本の約25倍!!また、道幅いっぱい自転車に乗っている中国の人たちの姿を写真などで見たことがあると思いますが、バスやタクシーも日本以上に走っていました。ただ、人が横断歩道を渡らず、というか、信号機が少なく、大通りを平気で横切っているのには、あ然としました。(交通事故はなぜか少ないようですが。)勇気のない人は、渡れずにずっとその場に立ちつくすそうです。

中国のトイレ事情は、以前に比べかなり改善されたらしいのですが、カギなし、ペーパーなし、水なし、という最悪な状況の所もありました。日本のように、当たり前用が足せるありがたさを感じました。

中国を訪問するにあたって、私が一番楽しみにしていたことはホームステイです。私と同じ、中学生の女の子の王瀟さんの家に2日間滞在させていただきました。日常生活でよく使う中国語は研修時に学んで行きましたが、実際よく使ったのは英語でした。いざとなったら、筆談か単語を並べたカタコトの英語でどうにかなる、と持ち前のお気楽さで構えていた私でしたが王瀟さんの英語は見事なものでした。まさに、英語ペラペラという感じです。王瀟さんは一人っ子で両親と3人家族でした。静かで落ち着いた雰囲気のマンションに住んでいました。入り口には警備の人が常に監視していて、日本とは少し違うなと思いました。

また、ドラえもんや名探偵コナン、フルーツバスケットなどの漫画は、中国でも人気だそうで、王瀟さんのお部屋にも置かれていました。漫画のことで私達はとても仲良しになりました。緊張していた気持ちも薄れて、長い間2人でしゃべりました。王瀟さんは中国の歌を歌ってくれたり、独舞も披露してくれました。私は、とても楽しい時間を過ごすことができました。

日本から約2時間半で到着する上海では、本物のパンダを見ました。

天安門広場にかけてあった毛沢東さんについても調べてみたいと思いました。

買い物に行ったときのスーパーマーケットでは、万引き防止のためか、カバンの持ち込みに制限がありました。

最後に、中学生訪中親善使節団として、違う学校の同じ中学生12名と出会えたことは、私の宝物になりました。『みんなと友達になる』という目標を達成できたと思います。解散式では、離れるのが寂しかったです。

今後の日本と中国の友好の為に、この6日間で学んだ大きなすばらしい経験を生かしていきたいと思っています。

この6日間、どうもありがとうございました。また会う日まで。再見!!



万里の長城でらくだに乗ったよ!

ホームステイから学んだこと



附属高松中学校
溝 渕 悠 代

私がこの中国訪問で一番期待を抱き、一番不安を感じていたのがホームステイである。どんな家族だろうか、きちんと話せるだろうか。緊張しながら私はホストファミリーと出会った。しかしホストファミリーはとても優しく私の緊張はすぐほぐれてしまった。

家に帰ってからたくさん話をした。学校のこと、勉強のこと、家族のこと……。主に筆談と英語で話した。ただ話すことがこんなに難しいとは思わなかった。相手はとても英語の発音がうまくて聞きとれない時もあった。自分の伝えたいことをうまく英語にできず、ふがいなさも感じた。しかし互いに、真剣に気持ちを伝えようと努力している様子は伝わってきた。だからとても楽しかった。話すのに夢中で気付いたらもう12時になっていた。疲れたけれどとても充実した気持ちで床に就いた。

2日目、ホストファミリーは私のためにホームパーティーを開いてくれた。1日目とは違い、お父さんの友達も数人来ていたので、初め私は昨日のように話せなかった。しかしお父さんの友人と卓球をしているうちに仲良くなることができた。その後一緒にカラオケをしたり、中国語を教してもらったりした。ホストファミリーだけでなく他の中国の人ともたくさん交流して楽しむことができて本当によかったと思う。また最後には皆でダンスをした。私の知らない踊りだったけれど、丁寧に教えてくれた。それまでの私だったら、踊ることを恥ずかしがっていたと思う。でもその時は自分でもこれが私だろうかと思う程積極的に楽しく踊ることができた。中国で人とふれあうことでそれまで少し消極的だった私が変わることができたのだと思う。

次の日別れる時は本当に悲しかった。たった2日間だけだったのに、何年も彼らと一緒にいたような気がした。彼らは私の第二の家族なのだと感じた。きっともう一度、私のもう一つの家族に会いにここに来よう、と私はバスのガラスごしに彼らを見ながら思った。私をあたたかくそして優しく迎え入れてくれたホストファミリー、ありがとう。きっとまた会いに来るからね。

そして私がこの中国訪問で学んだことは、交流というものの難しさ、楽しさ、大切さだと思う。国境を越えてつながるものがあるのだ。それを私は、ホームステイでの実体験を通し知ることができた。本当に貴重な体験だったと思う。受験生なのではじめは中国へ行くことに少し迷いがあった。しかし今は中国に行くことができ本当によかったと感じている。

これからはこの体験を活かしてもっとたくさんの国の人と交流したい。そして自分自身を高めていくとともに交流の輪をもっと広めていきたいと思う。



第十中学校で 刘薇さんと

「中国を訪れて」



高松市立光洋中学校
竹内 滋彦

今回訪中親善使節団として訪れた中国での旅はとてもよい体験の場となった。その中でも特に、3つの事が印象深かった。

まず自分にとって、初めてとなるホームステイである。ホストファミリー先の子の名前は佳力^{ジャリ}という子だった。彼は、英語と中国語両方話せるのだが、話で聞いていた以上にペラペラで、聞き取るのが難しい位早口で話す。まさか、こんなに話せるとは思いもよらなかったのもっと英会話の練習をしておけばよかったと後悔するハメになった。

また、彼の家族の人は皆、初対面の僕に対して優しくしてくれた。今、日本では、こういう温かい心を持つ人が除々に少なくなっているように、僕は思う。2日目の夜は彼の友達が沢山来て、少しの荷物でも、「疲れていたら持つよ。」等と、とにかく客人に対してはとても親切にしてくれる。僕は、今度彼らを迎える立場に立った時、同じように温かく迎えたいと思う。

二つ目に、北方民族の侵入を防ぐために造った、万里の長城の見学だ。教科書や本等の写真でしか見たことがなかった長城だったが、間近で見ると本当に大きく長い。僕が登ったのは男坂だったが、いざ登ってみると、坂はそうでもないが、階段の傾斜がすごく急でまた不揃いな階段で、下を見ながら登り降りしなくてはいつ落ちるのか分からない程で、これなら北方民族もなかなか侵入できないと納得でき、勉強になった。そして一番驚いたのは、長城から眺める景色である。周りを見れば、全て山とっていい程山に囲まれていて、その山々の上には、遠々と長く長城が見える。単純な景色なのにすごく心を揺さぶられた。今でも、目を閉じれば鮮明に思い出される。できることならまた登ってみたいと思う。

三つ目に、神技ともいえる程の大技を見せつけた上海雑技団の見物だ。テレビでしか観た事のない上海雑技団を生で見れた。その多くの技の中でも、特に二つ心に残った。一つ目に、男性団員のするアクロバットだ。前転、バク転、宙返り等、次々と出す巧みな技にあぜんとなった。人間は、特訓を繰り返せばここまでできるものなのか、と感銘を受けた。

次に、球状の檻の中に次々とバイクで入りこみ、最高5人がその中で目まぐるしいスピードで駆けるというものだ。見てるこちらが吐きそうになる程で、さすがにこれには驚いた。この見物を通して、この人達も、今は笑顔で演じているが裏では絶え間ない努力をしてきたと思った。何か一つを極めるためには、根性と努力が必要だと思う。僕は、この人達の根性を見習いたいと思う。

最後に、この旅では、驚きの連続だった。しかし、この旅を通して中国に対する理解が深くなった。これからも、日中友好の意思を大事にしていける自分になりたいと思う。



ホストファミリーの鄢佳力君と

広大でエネルギーみなぎる中国



高松市立一宮中学校
喜岡大哉

今回僕が訪中して学ぼうと思っていたのは、中国の歴史や文化についてだった。これらが現代の中国の建物や人々の生活の中にどのような形であるのか自分の目で確かめたいと思った。

まずは歴史からだ。よく中国四千年の歴史などというが、実はもっと昔から中国の歴史は始まっていた。僕が知る限りでは、北京原人のころからではないだろうか。そして、紀元前約二千年ごろには、すでに高度な文明を持っていたそうだ。秦の始皇帝の時に最初の万里の長城が造られ、その後長い年月を経て今の形ができあがった。それとともに、多くの史跡ができていった。今回訪ずれた故宮や滕王閣がそうだ。これらを見学して感じたのは、中国の歴史上の建物は、日本では考えられないほど大きく、壁などに赤色等を基調とした派手な装飾が多いということだ。頭の中で描いていたイメージだけの中国に実際に行ってみると、想像以上のことばかりでとても驚いた。長い歴史を持つ大都市は今も成長を続け、さらに新しい歴史を生み出している。中国の力強いパワーに感動した。

中国の文化から思ったことは、とにかく辛い食べ物が多いということだ。中華料理店へ行った時に出されたマーボー豆腐は、慣れていない僕にとっては苦痛だった。舌とノドがヒリヒリしてしゃべることもできなかった。中華料理は辛いとは知っていたが、ここまで辛いとは思っていなかった。あのマーボー豆腐で辛に慣れたおかげで、その後はおいしく食事ができた。体験してみないと分からないものだと、その時心の中で思った。

ホームステイ先の陳さんの家では文化の違いにたじたじだった。まずは玄関で驚いた。玄関には段差がなく、敷かれているカーペットの上で靴をぬぐのだ。次に風呂だ。中国の人々は基本的に、湯につかって体を温めるということをしないようだ。風呂はホテルのようにカーテンで区切るだけの物と、和式トイレがある所にシャワーだけあり、トイレから水が流れていくという2種類のものがあつた。僕は後者を使ってみたが、ゆっくりあたたまれず、風呂場から出たあと、少し寒かつた。

陳さん一家は僕のことを大歓迎してくれた。中学2年の雨^{イタオ}稲君は、両親の言葉を英語で僕に伝えてくれた。マンションの屋上でした卓球はとても楽しかつた。



上海の高層ビル

この5泊6日の中国訪問では多くのことを学び体験した。そこから今までの自分の視野の狭さを痛感した。これからの時代は、自分の目を自分の国にとどめておくのではなく、世界に向けることが大切だと学んだ。「世界の喜岡になれ。自分の目で見たものは忘れないからな。」と担任の先生に言われ、今回の訪中に出発した。世界の喜岡にはなれないかもしれないが、今回の経験をまだ始まったばかりの高校生活や、これからの長い人生に活かしていこうと思う。

中国での思いで



高松市立香東中学校
坂井友太

僕は、本来昨年行けるはずだった中国の中学生との交流会が中止になった時は、残念に思いました。しかし今年の春またチャンスがおとずれた時には心が弾むようにうれしかったです。しかし、アイバル香川を出発した時には、少し不安でした。

上海に着いた時には、自分の目を疑いました。今までに見たことのないほどの数々のビル、日本では、まだ走っていないリアモーターカー。僕は、今までに東京などの大きな街に行ったことがないので心臓が破裂しそうなくらいおどろきました。中でも上海のテレビ塔は、串に刺さったダンゴのような形によくバランスをたもてるなあとおどろきました。

上海2日目は、中国に行ったらぜひ見たいと思っていたパンダを見ました。パンダは、ほとんど竹の葉を食べていて、なかなか来てくれなかったけど皆いろいろな写真を撮りました。その後の上海博物館では、中国の歴史を調べました。特に僕の気を引いたのは、中国で昔に使っていたお金で、その数におどろきました。とても広い部屋で壁にびっちり置いてあり、よくこれだけの数を集めたなと思いました。

その他に強く印象に残ったのは、ホームステイと万里の長城で、ホームステイではホストファミリーの人達がとても優しくしてくれ、楊源清（ヤンユエンチン）君は友達まで呼んで中国の子供が好きな遊びを教えてくれて、とても盛りあがりました。最後の夜には、ちょっと飽きてきた中華料理ではなく、なんと「櫻亭」という日本料理店へつれて入ってくれて、とてもおどろきました。

最後の観光地の万里の長城は、とても長く昔の人がこのような長い道を造るのには、いったいどれだけのお金と人の力が必要か考えると、とてもすごいことになると思う。

僕にとって今回中国という今まで行ったことのない国に行け、ホームステイなどができてとてもいい体験だったと思う。



上海でみんなとパチリ

2 度目の冒険日記



高松市立屋島中学校
堀 史 笑



李豆羅市長の歓迎会にて

2度目の冒険はあっけなく終わった。今こうして日本にいたことがものすごく淋しい。たった6日間しか中国に行っていないのに一緒に行った友達やホームステイ先の家族のことを思い出すとせつなくなる。でも6日間のうちに色々なことを学んだ気がする。その中でも私はものすごく大切なことを1つ学んだ気がする。それは貧富の差。日本じゃほとんど目にしない光景が目にかんてくる。小さな子供・足がない人・お年寄・そんな人々が私達に小さなおわんなどを差し出してくる。その人達のみなりを見るとあらかたの想像はつく。そして目をみたらハッキリと分かる。たえられない悲しい目をして、もう先が見えないほどの絶望さを感じさせる

まっくらな瞳でもそんな中に1つだけの希望が見える。もう何の気力も残っていない瞳で小さなおわんを私達に差し出し、声には出さず私達にこう、訴えかけてくる。「生きたい。」と…。

私にはそう聞こえた。でも私は後悔している。その時私には生きたいと聞こえていたはずなのに私は何もできなかった。見て見ぬふりをしてその場を通りすぎてしまった。なぜそんなことをしたのか、今でも分からない。その事をいつも考えてしまう。もしあの時私が手をさしのべていたらあの人はずっとずっと長い間、生きていられるのかもと思うってしまう。そう思えるのに何もできない自分がぐちゃぐちゃで腹が立つ。分ってるはずなのに、手がでない。ほんの少しのことなのに手がでない。そんな自分の情けなさに脱力するばかり。

そんな中、私の心に焼きつくように残っている光景がある。小さいすに座って目の前に小さなカンカンを置いて中国独特の楽器を持って曲をひいていた。微妙な調和のとてもいい音を奏でる音色。ついつい聞きいってしまう。でもどこか悲しそうでさびしそうなそんな音色。だからよけいに聞き入ってしまったのだろうか。じっとその人を見つめその曲を聴いていた。ただその場に立ちすくんでいただけ。その音色を耳に入れ心に入れ、その人の姿をしっかりと目に、そして心に焼きつけていた。でもやっぱり私には何もできなかった。見ることしかできなかった。でもそんな時その人に私よりも小さな女の子が何枚か持ったおさつをカンカンの中に入れていた。その時のその人の顔が忘れられない。今まで悲しい目をしてきたのに一瞬だけものすごく優しい目をした。その時の顔が私にとっての唯一の救いだった。見ていただけなのにこっちのほうのものすごく幸せだった。人が生まれてくるのは神様がいるからとかじゃなくて、人がいるからこそ人が生まれて、人がいるからこそ一緒に笑って泣いて怒って…すべて人がいるからこそ。だから人はけっして1人ではない。どんなに知らない人でもどこかで幸せを分けってもらったり分けたりできるもの。そんなことを学んだ。私にとって2度目の冒険は、人は1人ではないこと、いつでもどこでもだれかがそばにいること、人の大切さを学んだそんな冒険だった。この6日間私にとってすごく大切に重大な6日間だった。この6日間で学んだことを忘れず、これからまた新たな気持ちで生きていこうと思っている。2度目の冒険はこうして幕を閉じたのである。

